

博物館だより

No.33

平成21年1月1日

みやこ町歴史民俗博物館発行
福岡県京都郡みやこ町豊津1122-13
TEL 0930-33-4666
FAX 0930-33-4667

ミニ企画展 ダムに沈むムラ・伊良原①
「**屋根裏からのメッセージ**」
古いお札が語る山人の信仰世界

当館では2月3日(火)から3月1日(日)まで、ミニ企画展「屋根裏からのメッセージ」―古いお札が語る山人の信仰世界―を開催します。

この企画展は現在原営ダムの建設工事が進む町内伊良原地区にスポットを当て、独特の山間文化に彩られた伊良原の魅力をさまざまな切口から見つめ直してみたいとの考えから企画したものです。

第1回目となる今回は、平成19年にダム工事に伴い解体されたある民家から見つかった江戸時代の「お札」数百点を通して、山里のムラの「神仏への祈りの世界」を明らかにしていきます。

■開催場所

博物館 第2展示室

■観覧料

常設展の観覧料をご覧くださいいただけます。

1月期歴史講座のご案内

【漢詩文講座】

1月10日(土) 13時00分～

【古文書講座】

1月17日(土) 10時00分～

【みやこ学講座】 *座学

1月17日(土) 10時00分～

【金曜古文書講座】

1月23日(金) 10時00分～

【古典かな講座】

1月24日(土) 9時30分～



▲ずらりと並んだ「逸木コレクション」。日本の美が感じられます

11月・12月の活動日誌から

11月26日(水)、企画展「逸木コレクション展-part 2-」が始まり、逸木俊司さんからご寄贈いただいた貴重な古美術が勢ぞろいしました。芸術の秋にぴったり!

11月23日(日)、友の会主催の史跡散策バスハイクが行われました。見事な紅葉と古代伊都国の歴史遺産を巡り、秋の糸島を満喫しました。

11月26日(水)、節丸小学校で出前授業を行いました。火おこしや、勾玉作りを体験し、古代人の「大変さ」と「楽しさ」を実感してもらいました。

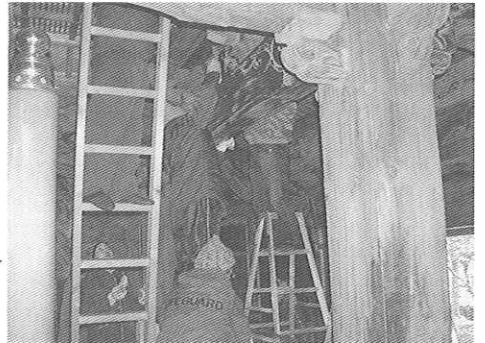
12月6日(土)、友の会恒例の「三重塔すず払い」が行われました。当日は思わぬ寒波により雪が降る中での作業でしたが、皆さん寒さをもろともせず塔をきれいにしてくださいました。



▲雷山千如寺にある樹齢400年の大楓。みごとに紅葉でした



▲「火きり杵」を使っでの発火体験。ちょっと疲れた様子…



▲参加者の連係プレーで塔はあっというまにきれいになりました

逸木俊司さんへ 日博協から表彰状進呈

平成18年以降、当館へ貴重な絵画資料や刀剣資料を寄贈された逸木俊司さん(勝山松田)に対し、財団法人日本博物館協会(竹内誠会長 国内約1300館が加盟 略称日博協)から協会顕彰者表彰が進呈されました。この賞は国内の博物館の振興



に功績のあった個人や機関に対し同協会が毎年数人を選定して進呈しているもので、逸木さんの寄贈は、地方博物館の所蔵資料充実に大きく寄与するものであると評価されました。

表彰式は11月20日に島根県松江市で行われましたが、逸木さんは都合により参加できなかったため、12月10日(水)に白石春夫町長から改めて表彰状の伝達が行われました。

なお、逸木さんの寄贈資料は、博物館に展示され、2月1日(日)まで公開されます。ぜひ一度ご覧下さい。

みやこの歴史発見伝 22 旧制豊津中学校

「角帽」事始め

角帽の由来

小倉小笠原藩の藩校を源流とする福岡県立育徳館高等学校（みやこ町豊津）の制服は角帽ですが、これは旧制中学校時代の明治二〇年代に始まったものです。その経緯については、制帽の採用当時、次のような話が生徒の間に流れていました。

角帽の由来

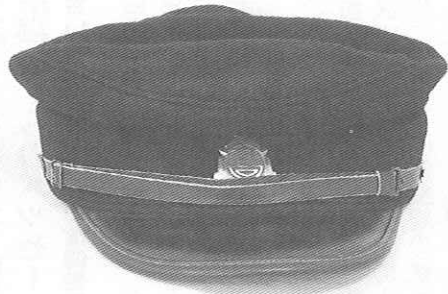
私共が豊津の一年生（明治二〇二年）のとき小笠原忠忱伯がお出でになり、この時一夜入江校長を御内家に招待され、種々談合の末「将来は英語なりされば英国といわず手近な米國より教師を輸入せよ。給料は拙者が出してやる。」といわれこれがハーバード先生聘用の糸口となったとのこと、御帰京の後土産代として生徒一同に角帽を送って下さったのが豊津中学の角帽の初まりである。（略）

（錦坂新聞「昭和二八年二月号」）

これは、畑功氏（明治二五年豊津尋常中学校卒。米国の大学を卒業後、慶應義塾大学の教授を歴任）による中学時代の回顧文です。角帽採用や米国人教師の招聘に関し、在校生レベルがここまで知り得る筈も無く、別の刊行物（『豊津中学校史』昭和二年）で畑氏自身が言っているように、これはあくまで「当時の噂」で、事実がどうか分かりません。

角帽採用の時期

旧制豊津中学校で実際に角帽が採用された年は、①明治一九年の卒業生が角帽を被ったことを記憶していないこと



▲角帽
校章は豊津高等学校時代のもの。



▲角帽姿の生徒が写る最古の写真（明治24年）

たことを記憶していないこと（『豊津中学校史』）、②角帽を被った最も古い生徒の写真が明治二四年（一八九二）のものであることなどからも、明治二〇年（一八八七）にまで絞り込むことができません。この期間内では、明治二一年一月一九日に旧豊津藩主小笠原忠忱（東京在住）が中学校を訪れています（小笠原文庫四一五「豊津中学校沿革書」）。したがって、時期的には畑氏の回顧文と符合することになります。当然、小笠原忠忱は入江淡校長と面談したでしょうか。この時、畑氏が言うような「種々談合」がなされた可能性もありますが、これ以上は確認のしようがありません。

と旧藩主の「自腹」

実は、角帽が制帽に採用される少し前、明治二〇年（一八八七）三月三二日に、豊津中学校は一度廃止になっていました（授業は県の許可を得て継続）。これは、明治一九年に文部省が出した「中学校令」によるもので、これによって、各府県に「尋常中学校」が設けられることになりましたが、一方、この中学校令には、府県費を充てることが出来るのは各府県で一つの尋常中学校に限る、という規定がありました。福岡県では福岡中学校が尋常中学校とされましたので、結果、豊津中学校は廃止されることになったのです。

しかし、中学校令と同日に出された「諸学校規則」第一条には、学校運営費を府県に寄附し、管理を府県知事に願ひ出るならば、その学校を府県立同等とみなす、という規定がありました。そのため、入江淡校長をはじめ学校関係者が奔走して寄附金を集め、県費は用いないのに何故か県立の「福岡県立豊津尋常中学校」が、廃校から三五日後の明治二〇年五月五日に開校したので。

そしてこの時、最も多額の寄附をしたのは、旧藩主小笠原忠忱と、彼が会長の奨学会

「豊前育英会」でした。その寄附は二〇年先までの約束を含んだもので、具体的には「学校運営費の年試算額約四〇〇〇円の内二〇〇〇円を二〇年間寄附する」というものでした。このことを踏まえ、前掲した畑氏の回顧文を読むと、この「当時の噂」は、旧藩主の「自腹」に頼るしかなかった、豊津尋常中学校の経営状況を象徴しているように思えます。この学校が全額県費経営の「純県立」となるのは、開校から一三年後の明治三三年（一九〇〇）四月です。（川本英紀）



▶明治30年頃の寄宿舎生卒業記念写真
中央の蝶ネクタイが入江淡校長で、角帽をかぶっている。